

# 家族のつながりの変化による影響

家族に期待される役割は時代とともに変化しているが、人々にとって大切な存在であることには変わりがない。しかし前節で見たように、家族がそれぞれ個別に行動する時間が多くなった、家族が離れて暮らすことが多くなったなど、家族のつながりの弱まりを示す動きが見られる。そしてその結果、家族は期待される役割を発揮できなくなる可能性が懸念されている。そこで本節では、家族のつながりの変化が、家族がこれまで果たしてきた役割にどのような影響をもたらしているのか検討していくこととする。

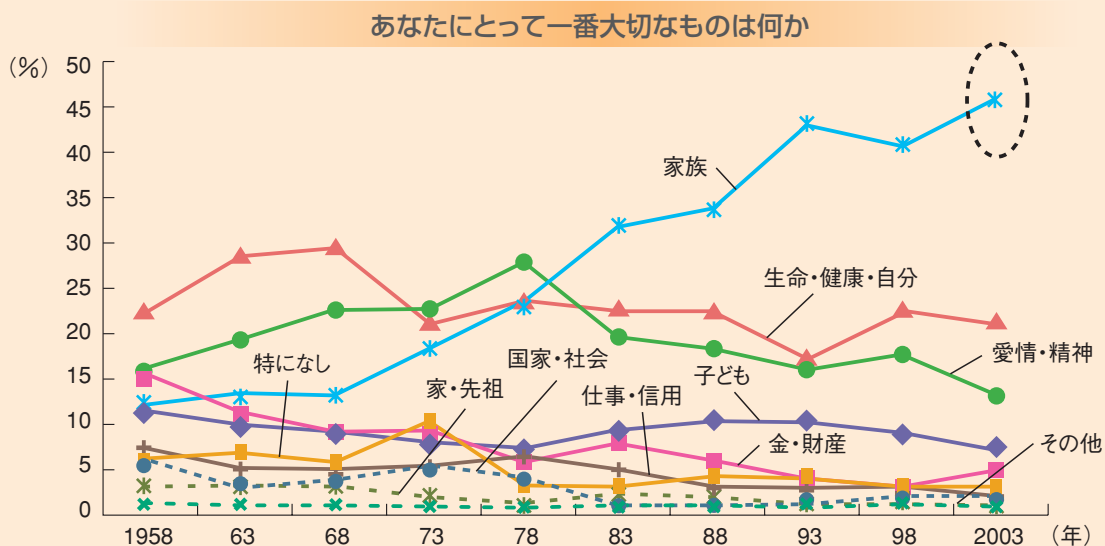
## 1. 精神的やすらぎへの影響

### 家族を大切と思う人は増加している

人は家族に様々な役割を求めているが、第1節で指摘したように、その中でも、やすらぎを得る、愛情を感じるなど、家族から精神的なやすらぎや充足感を得ようとしている。先に、近年、心の豊かさがより重視されるようになった点を見たが、このような中で精神的な豊かさをもたらすことが期待される家族の存在が、人々にとってより重要な存在になっていると考えられる。

「あなたにとって一番大切なものは何か」との質問に対し、「家族」を挙げる人の割合は1958年には約1割に過ぎなかったが、70年代以降は一貫して高まり続け、2003年には約5割となっている（第1-2-1図）。前節では家族のつながりの弱まりを幾つかの指標から見てきたが、家族を何よりも大切と思う人は、逆に大きく増えていることがこの結果から見て取れる。

第1-2-1図 家族が一番大切と思う人は増加している



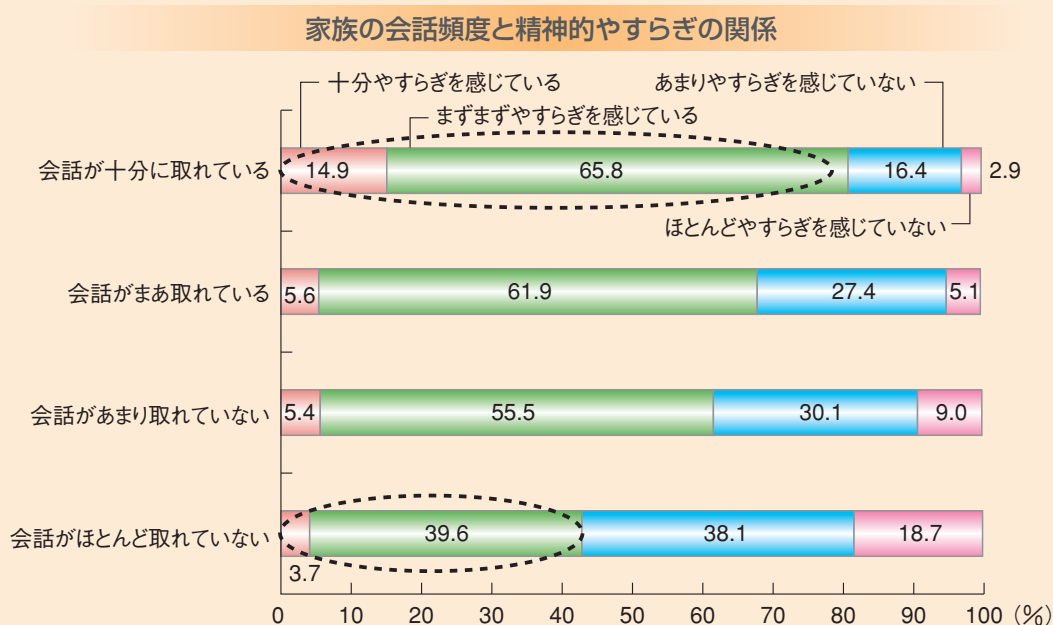
(備考) 1. 統計数理研究所「国民性の研究全国調査」により作成。  
 2. 「あなたにとって一番大切と思うものはなんですか。一つだけあげてください。」との間に対し自由記入してもらった回答を分類したもの。  
 3. 回答者は、20歳以上80歳未満の有権者。

## 家族のつながりが十分でないと精神的やすらぎが得られない

先に、家族とのつながりがある人ほど精神的やすらぎを得られることを統計的に確認したが、以下では改めてその関係を見てみよう。なお、家族は様々な行動を通じてお互いのつながりが生まれているが、中でも人と人との最も基本的かつ重要なコミュニケーションの手段の一つである会話は、家族のつながりの強さを示す一つの尺度になると考えられる。そこで、「家族との会話頻度」と「精神的やすらぎ」について、その関係を明らかにしていきたい。

まず「家族との会話が十分取れている」と回答した人について見ると、80.7%が精神的やすらぎを感じている一方、やすらぎをほとんど感じていない人の割合は2.9%に過ぎない（第1-2-2図）。そして、家族との会話の頻度が落ちるほど、やすらぎを感じる人の割合が低下する傾向が見られ、家族との会話がほとんど取れていないと回答した人で見ると、やすらぎを感じる人の割合は43.3%に低下する一方で、ほとんどやすらぎを感じていない人の割合は18.7%に高まっている。もちろん、家族との会話がほとんどできていないと回答しながら精神的やすらぎを得ている人もいることから、他の要素も精神的やすらぎに影響すると考えられるが、以上の関係を見る限り、家族とどれだけ会話するかが、精神的やすらぎを得るためには重要であることをうかがい知ることができる。

第1-2-2図 家族とのつながりがある人ほど精神的やすらぎが得られる



- (備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」(2007年)により特別集計。  
 2. 「日頃の生活の中で、どの程度精神的やすらぎを感じていますか。」との問に対する回答者の割合と家族との交流量の割合を示したもの。  
 3. 同居家族がいる者を対象としている。  
 4. 家族との交流量は「会話」の頻度を「週5日以上」、「週3~4日」、「週1~2日」、「ほとんどしない」との回答に対する割合をそれぞれ「十分取れている」、「まあ取れている」、「あまり取れていない」、「ほとんど取れていない」に置き換えたもの。  
 5. 回答者は、全国の15歳以上80歳未満の男女3,383人(無回答を除く)。

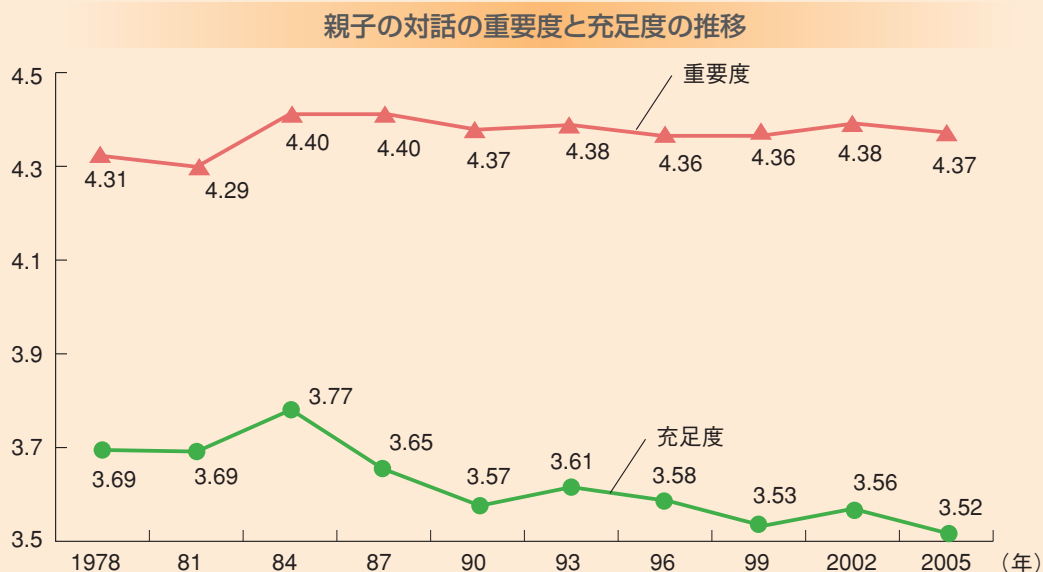
## 親子の会話の充足度が低下している

精神的やすらぎを得るためには、家族との会話が必要であることを見たが、家族行動の個別化が進むことで、人々は家族と十分に会話ができなくなっている可能性がある。そこで、国民生活選好度調査から、「親子の間に対話があり互いに相手を信頼しているかどうか」について、どの程度重要と感じているか（重要度）と、現在どれだけ満たされているか（充足度）を見ていこう。

まず重要度得点<sup>8</sup>については、78年から2005年にかけて高水準で推移している一方で、充足度得点<sup>9</sup>は84年をピークに低下が続き、2005年には最も低い水準となっている（第1-2-3図）。つまり、親子の対話は、過去30年程度において、一貫して重要であると認識されているものの、近年になるほど、人々は親子で対話が十分できていないと感じていることが見て取れる。

このように、総じて見ると、人々は家族と十分に会話しているとの意識を持ってなくなってきているが、このような家族との会話の充足度の低下により、精神的やすらぎを得られにくくしていることが近年の生活満足度の低下をもたらしている要因の一つとなっているとも考えられる。

第1-2-3図 親子の対話の重要度と充足度には乖離が見られる



- (備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」により作成。  
 2. 「親子の間の対話があり、互いに相手を信頼していること」の「重要である度合い」について、「きわめて重要」から「まったく重要でない」まで5段階で尋ねたものを得点化したもので、重要度の5段階それぞれに「きわめて重要」=5点から「まったく重要でない」=1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点を求め、重要度に関する人々の評価を指標化したもの。  
 3. 充足度は「充足している度合い」について「十分満たされている」から「ほとんど満たされていない」まで5段階で尋ねたものを得点化したもので、充足度の5段階それぞれに「十分満たされている」=5点から「ほとんど満たされていない」=1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点を求め、充足度に関する人々の評価を指標化したもの。  
 4. 回答者は、全国の15歳から75歳未満の男女。

- 8 重要度得点とは、各質問項目の「重要である度合い」を得点化したもので、重要度の5段階それぞれに「きわめて重要」=5点から「まったく重要でない」=1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点を求め、重要度に関する人々の評価を指標化したもの。  
 9 充足度得点とは、各質問項目の「充足されている度合い」を得点化したもので、充足度の5段階それぞれに「十分満たされている」=5点から「ほとんど満たされていない」=1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点を求め、充足度に関する人々の評価を指標化したもの。

## 2. 家庭における教育力の低下

第1節の冒頭で示したように、家族には「子どもを育てる」役割も求められている。家庭における教育は、子どもが社会に適応し生きていく能力や知恵を身に付けさせる教育の原点である。基本的な生活習慣や感性などの基礎は家族の中で培われるものであり、親が子どもに対して、愛情を持ってしっかりとしつけをすることが重要である。しかし、これまで見たような家族のつながりの変化が、こうした役割を弱めている可能性がある。そこで、以下ではその影響について見ていくこととする。

### 子どもに対してしつけがあまりできていない

家庭における教育力は落ちているのだろうか。「昔と比べて親は自分の子どもに対して、しつけがきちんとできているか」との質問に対して、「どちらかと言えばできていない」と「全くできていない」と回答した人を合わせた割合は52.6%となり、半数以上が「できていない」と感じていることが分かった（第1-2-4図）。

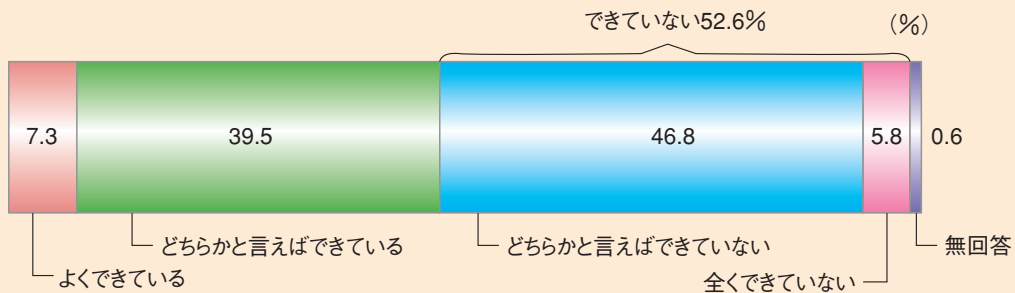
さらに、「どちらかと言えばできていない」と「全くできていない」と回答した人に対して、その理由を尋ねたところ、「親自身が基本的な生活習慣が身に付いていない」、「親の責任感や心構えが弱い」と回答した人がそれぞれ約6割と親自身のことを理由に挙げる割合が高い（第1-2-5図）。しかし、これに次いで、「祖父母世代から父母世代へ知恵が伝承されていない」、「家族と一緒に過ごす時間が少ない」、「親の仕事が忙しすぎる」などを挙げている人もそれぞれ約3割前後に上っている。

第1節では、親の仕事が忙しい、子どもは塾に忙しくまた家でも家族と触れ合わないなどの理由から、家族が個別に行動する傾向にある点を指摘したが、上記の結果から、このような家族のつながりの変化が、家庭における教育力を低下させていることが示唆される。

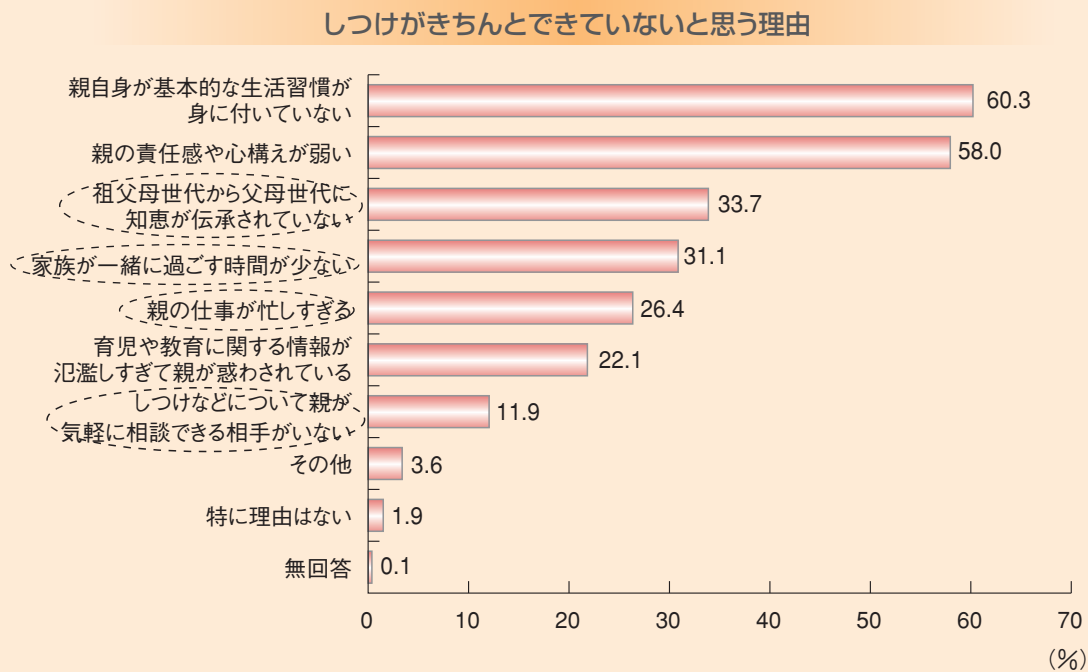
第1-2-4図

昔と比べて親は自分の子どもに対してしつけがあまりできていない

親の子どもに対するしつけの度合い



- (備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」(2007年)により作成。  
 2. 「昔と比べて親は自分の子どもに対して社会規範やしつけがきちんとできていると思いますか。(○は1つ)」という問に対する回答者の割合。  
 3. 回答者は、全国の15歳以上80歳未満の男女3,361人。



(備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」(2007年)により作成。

2. 「昔と比べて親は自分の子どもに対して社会規範やしつけがきちんとできていると思いますか。(○は1つ)」という間に、「どちらかと言えばできていない」、「全くできていない」と答えた人に、「それでは、親が自分の子どもに対して社会規範やしつけができていない理由は何だと思えますか。お考えに近いものを3つまでお答えください。(○は3つまで)」という間に対する回答者の割合。

3. 回答者は、全国の15歳以上80歳未満の男女1,779人。

## 多くの子どもに「孤食」が見受けられる

次に、家族との食事について見てみよう。家族の食卓は、家族のきずなを深める団らんの場であると同時に、子どもが規則的でバランスの良い食事をする習慣や、食べる姿勢、食事のマナーなど、基礎的な食習慣を身に付けたり、社会性などを学習する重要な場と言えよう。

しかし、家族行動の個別化などにより、家族が一緒に食卓を囲む機会は減少している。家族そろって夕食をとる頻度を見ると、毎日一緒にとる割合は1976年の36.5%から低下傾向にあり、2004年には25.9%となっている。一方、週3日以下<sup>10</sup>の割合は上昇しており、2004年には53.9%と半数以上を占めている(第1-2-6図)。

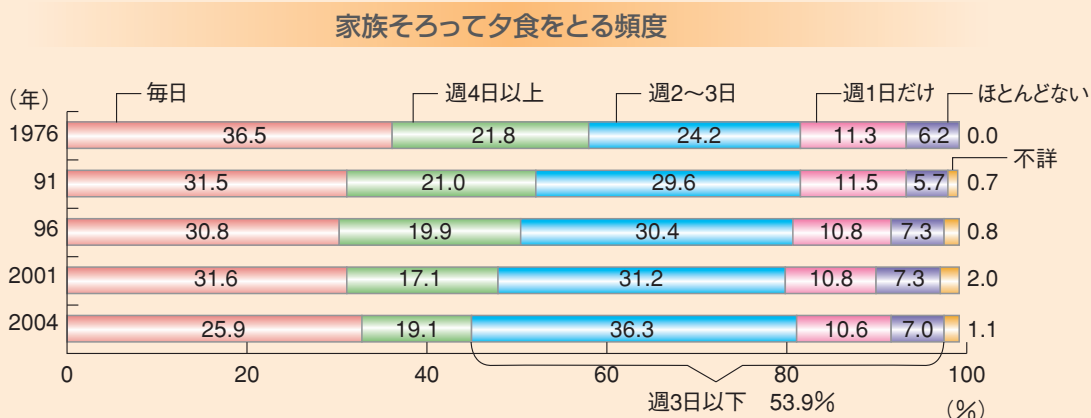
また、朝食についても、小学生の5割、中学生では7割が親と一緒にとっていない。さらに、「自分ひとりで」朝食をとっている割合は、小学生は2割、中学生の4割にも達しており、子どもが一人で食事をするいわゆる「孤食」も見受けられる(第1-2-7図)。

このように、食を通じた家族のコミュニケーションの機会の減少は、子どもの健康的な心身を育み、豊かな人格を形成する場としての家族機能が低下していることを意味している。

10 「週2～3日」、「週1日だけ」、「ほとんどない」を合わせた割合。

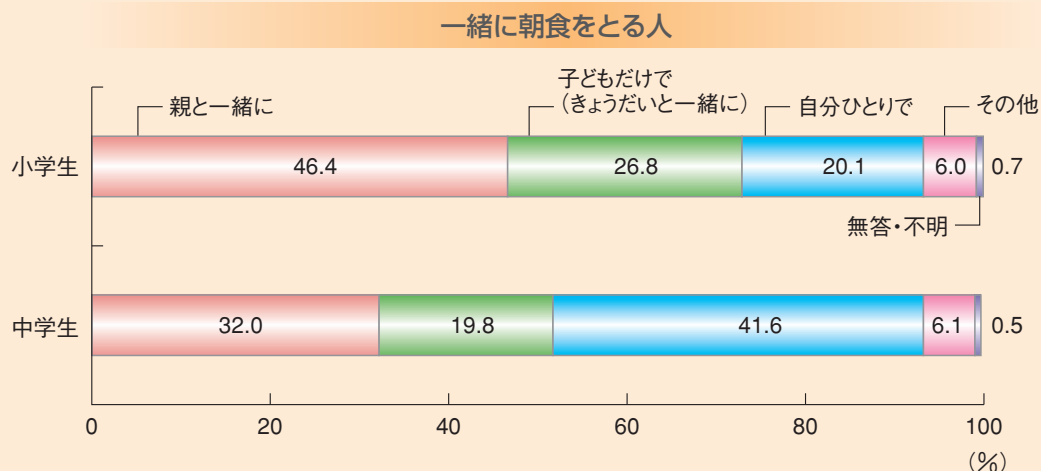


第1-2-6図 家族そろって夕食をとる頻度は減少している



(備考) 厚生労働省「児童環境調査」(1976、91、96、2001年)および「全国家庭児童調査」(2004年)により作成。

第1-2-7図 親と一緒に朝食をとっている子どもは半数以下



(備考) 1. 文部科学省「義務教育に関する意識調査」(2005年度)による。  
 2. 「いつも朝ごはんは誰と食べる人が多いか。」という問に対する回答者の割合。  
 3. 回答者は、全国の小学校4~6年生3,350人および中学校1~3年生2,924人。

親子の会話と子どもの知的好奇心は関係性が深い

親子の会話に対する充足度が低下している。また、家族で一緒に食事をする機会が減少しているなど、親と子どものコミュニケーションが以前に比べて取りづらい環境になっていることを見てきた。では、このような環境の下、親子のコミュニケーションが不足した場合、子どもはどのような影響を受けるのだろうか。

以下では、親と子どもとの会話量と子どもの学習の取り組み方との関係を見ることで、そのような影響について検討しよう。

ある民間企業のアンケートでは、小学校高学年を対象に、親との会話量と学習への取り組み方について尋ねている。そこで、親との会話量が多いか少ないかによって、学習への取り組み方がどのように変化するかを見よう。アンケートでは、学習への取り組み方を把握するために、「わからないことがあれば知りたいと思うか」と尋ねているが、親との会話が多いと回答した小学生

の71.3%が「知りたいと思う」と回答している。一方で、親との会話が少ない小学生では52.6%がそのような回答をしているに過ぎず、親との会話が多くの小学生に比べて18.7%ポイント低い結果となっている。

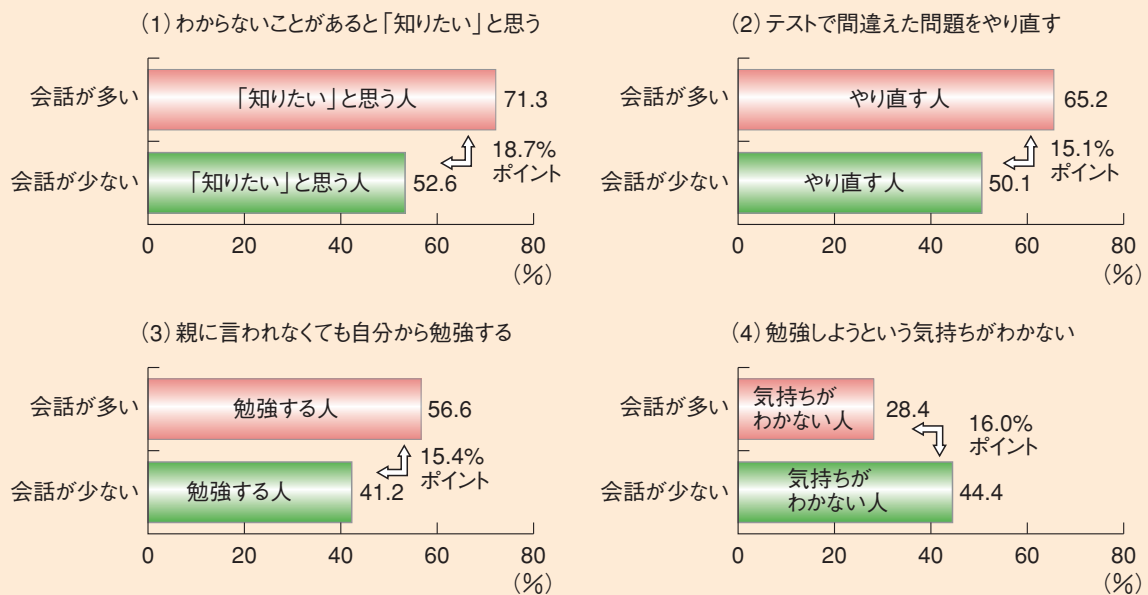
また「テストで間違えた問題をやり直す」、「親に言われなくても自分から勉強する」との間に対して、それぞれ「やり直す」、「勉強する」と回答した小学生の割合は、会話の多い小学生の方が、会話の少ない小学生より高くなっている（第1-2-8図）。

一方、「勉強しようという気持ちがわからない」については、会話の多い小学生の28.4%が「わからない」と回答しているのに対し、会話の少ない小学生では44.4%と割合が高い。

このような結果は、親と子どもの会話の量によって子どもの学習の取り組み方に差が出ることを示唆するものと言える。

### 第1-2-8図 親との会話が多くのほど知的な好奇心が育まれる

#### 学習の取り組み方と親子関係



- (備考) 1. 株式会社ベネッセコーポレーション「第1回子ども生活実態基本調査」(2005年)により作成。  
 2. 小学校4~6年生までの4,240人(有効回答数)を対象に集計したもの。調査自体は小学校4~高校2年生までの計14,841人を対象に実施。  
 3. 親との会話は、「学校のできごとについて」「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「友達のことについて」「社会のできごとやニュースについて」の5項目で、父親と母親それぞれとのくらし話をするかを尋ねている。これら10項目について、「よく話をする」から「ぜんぜん話さない」までの回答を得点とみなし、その合計点を会話量の指標とした。そのうえで、各群の度数がほぼ半分ずつになるように、「会話が多い」群と「会話が少ない」群を設定している。  
 4. 学習の取り組み方は、それぞれの項目に対して、「とてもそう」と「まあそう」の割合を足したものである。  
 5. 調査は全部で、12項目に尋ねており、そのうち、「会話が多い」群と「会話が少ない」群の差が大きい上位4項目について掲載している。